

平成 14 (2002) 年度修士論文要旨

児童虐待 母親へのケアと支援

教育学 田 井 直 子

昨今児童虐待は児童相談所によせられる相談件数の増加とともに深刻化したといわれ、子どもの権利擁護が声高に叫ばれている。「大人が子どもにふるう暴力」という関係性の中で起こる虐待の問題の解決には、関係各機関の連携が重要であると数年来言われ続けてきた。予防と早期発見、子どもの保護がなによりも重要であり、大人は子どもを保護し守っていく立場を提案されつづけてきた。その一方で、虐待してしまう親が抱えている問題については、見過ごされてきた。

母親への支援というものは、あくまでも「子どもを愛するやさしいお母さん」への支援でしかなく、多くの女性が「母親失格」の烙印に怯えてきた。母性神話は崩壊したと語られだして久しいが、実際に母親の多くは一日の長い時間を子どもと過ごし、孤立感や子どもへのイライラ、それらを感じる自分への不安を抱えているのである。女性は暴力の被害者になりやすく、母親への支援はただ「子育て支援」だけでは充分でなく、母親自身が虐待からのサバイバーで

ある場合も視野に入れて考えていく必要がある。彼女たちの 10%強は虐待の原因を「世代間連鎖」にあると考えている。かつて虐待された子どもたちは、現在子育てを担う年代になり問題を提起している。

以前はこれら児童虐待について考え、対策を打ち出し、実行する人々は専門家たちであった。21世紀に入ってから、行政は児童虐待防止のネットワークを地域にまで広げ、地域における援助者の養成に努めている。

教育は児童虐待に対して「予防」というアプローチがとれる。母親に限らず、子どもと接する大人たちに対して正しい知識と、相談機関などを紹介することができる。教育にはもうひとつのアプローチの可能性がある。忘れがちなことであるが、虐待してしまった親への対策として「矯正・回復の教育」である。

教育が「児童虐待の世代間連鎖」を断ち切る何らかの力を持つという視点に立ち、母親たちへの支援についてどのような方法があるのか考えていきたい。

「学力」から解放された学びについての考察

教育学 厚 見 誠 一

本稿は、「学力低下論」も含めた「学力論」を、それがもつ枠組み全体を批判的に考察し、学力から脱却した「学び」への考察をおこない、その実践の視座の構築を目指したものである。

第1章においては、おもに「学力低下」に関するオピニオンリーダーともなっている荻谷剛彦や西村和雄などの論述に焦点をあて、「学力論」がもつ枠組み全体への批判的考察をおこなった。

2002 年より教科内容の 3 割削減、総合・選択の時間の導入などの特徴をもつ新学習指導要領の完全実施が始められたが、この指導要領に関しては、それが実施される以前から、文部科学省の「ゆとり教育」路線全体への批判も含めて、学力低下に関する論議が引き起こされている。そしてそれに対する寺脇研などによる文部科学省からの反論などもさかんに行われた。現在、「学力」をめぐる論議は混迷を深めているといっても過言ではない。

しかしこの「学力」をめぐる論議は、佐藤学が「学びからの逃走」とよんだ子どもたちを取り巻く学びの状況—それについては学力低下を主張する側からも、それを否定する側からも懸念されている—に対していかなる回答をも持ち得ない。なぜなら「学力論」は学力をどう語ろうとも、子どもの外部で定められたものを身につけさせるという「操作」の視点をもつからである。そこには子どもたちが見失っている、子どもたちにとっての「学ぶ意味」への視線は存在しない。

第 2 章では、学力から脱却した「学び」への考察の端緒になるものとして、林竹二の実践についての考察をおこなった。そこでは林の実践を検証していく視座として、借り物の知識の吟味・主体的に学ぶ・高みにのぼる、をあげ、その検証をおこなった。そしてその検証から、子どもたちが自ら、学ぶという行為の目的を形成していくという視点を導き出した。

第 3 章では、おもに佐伯胖の論述を援用しながら「学ぶ」という意味についての考察を行な

った。「なぜ学ぶことは良いことなのか」という問いから出発し、そこから「学び」という行為を社会における「自分という存在の発見・形成」におく視点を提示した。

さらに、佐伯による自我発達の段階から拡張した、学びへの解釈を援用して学びにおける「第二の自我」の重要性にふれ、それとの対話を導くうえでの「吟味」の重要性について論じた。

第 4 章では、第 3 章で提示した「学び」への視点にもとづく実践のあり方についての考察をおこなった。教室での学びを導く 4 つの要素として、教師・教材・学級と「学び」の行為者である子どもをあげ、それがどのように関係づけられるのかについて考察した。佐伯の「学びのドーナツ」を援用しながら、第二の自我を育てる二人称的他者と交流する世界である YOU 世界との関わりをとおして、匿名性をもつ三人称的他者の世界であり、現実の社会・文化的実践の場である THEY 世界を認識していく視点を提示し、それによって現実の社会・文化的実践の場における「自分という存在の発見・形成」が行われることを論じた。そしてそういった学びひらくものとしての「総合の時間」の可能性について論じた。

「おわりに」では、それまでに論じてきたことをふまえて、実際に「総合の時間」の実践の中で取り組むことを目指している「大阪大空襲」が持つ意味について述べ、本論のまとめとしている。

青年期の課題に応える授業の創造

教育学 国 富 智 子

第Ⅰ章

従来の高校教育には「受験学力競争への従属」「教養主義へのとらわれ」「伝達型授業への安住」「教師の主体性・専門性の欠如」等々の問題点がある。こうした現状に対し、高校教育をどのように転換していけばよいのか。

まず第一に、高校教育を「大衆的な青年期教育」としてはっきり位置づけ、青年期の課題に応える学びを創り出すことである。学校教育における過酷な競争原理のもとで、生徒たちは自尊感情を傷つけられており、それゆえ彼らはアイデンティティーの確立を切実に求めている。第二に、学びにおけるリアリティーを回復することである。「学びからの逃走」は、「学ぶ」行為が人生の課題や「生きる」営みから切り離されてしまっているところから起こっている。私たちは、「生徒の必要」と「時代の要請」と、この両者をきり結ぶ地点に立って、学びを構想していく必要がある。第三に、生徒たちが社会に参加していく学びを保障することである。自己発見・自己実現は、社会参加を通じてこそ可能となる。そればかりでなく、生徒たち自身、社会参加への強い要求を持っている。第四に、授業づくりに生徒たちを参加させることである。生徒の参加という場合、生徒と教師が共同で授業を創っていくという筋道と、三社協議会・四者協議会など、自治組織を通じて参加する筋道と、二通りある。

第Ⅱ章

第Ⅱ章では、吉田和子氏の授業実践記録を分析した。吉田氏は、「生徒たちは今どんな現実

世界を生きていて、これからの人生を生きていく上でどんな視点、力量、知性が求められているか」「今がどんな時代で、一人一人の人間にどんな視点、力量、知性が求められているか」という二つのことを見据えて学びを構想している。

1993年度の実践は、離婚問題をテーマに、生徒たちが自らの感情・感覚・認識を語ることから出発し、共同学習を通じて日本の現代社会への批判的な目を獲得していった実践である。生徒たちが「授業内容の選択権」を行使している点や、「リアルな経験を持った大人」ととの出会いを仕組んでいる点が着目される。1995年度の実践は、異質な文化を持った大人と出会わせることで、多様な価値観や生き方を発見させ、複眼的思考力をはぐくもうと試みた実践である。社会通念とは異なる価値基準で自らのライフスタイルを選びとった人々を教室に登場させている点、生徒たちが授業づくりに深く参与している点などに特徴がある。

第Ⅲ章

私なりに授業のデザインを試みるに際し、「働くということ」をテーマに選んだ。それはなぜなのか。

まず一点目に、労働の問題は、生徒たちが今まさに直面している問題だからである。若者の就職難を報じるおびただしいマスコミの情報、「日本型雇用」の崩壊にともなう人生モデルの喪失、「やりたいこと」志向をあおる社会的メカニズムのもとで職業生活へのルートが見えにくくされていることなどが原因で、生徒たちは自らの将来に強い不安を抱いている。

二点目に、労働問題は、現代的課題、すなわち大人が解決を迫られている問題でもあるからである。企業の海外進出による産業の空洞化、中高年層の大量リストラ、過労死・過労自殺、ホームレスの増加……これらはみな若者の就職難と根を一つにしている。

三点目に、労働の問題は、生徒と教師の共同の学びを可能にするからである。それは、解決策が見えないからであるが、容易に解決できない問題に満ち満ちている今日、解決策の見えない課題に共同で取り組む授業が今むしろ求められている。

第Ⅳ章

「働くということ」というテーマで、授業を次のように構想した。

- A フリーター問題を考える→意識調査や統計の読み取りの後、フリーター問題について討論する。また、フリーターと正社員にインタビューする。
- B アルバイト体験記を書く→夏休みにアルバイトをし、働く自分、働く他者、労働環境、職場の人間関係などを意識的に見つめて体験記を書く。
- C 労働聞き書きを通じて仕事の本質を考える→インタビューの仕方を学んだ後、職業人から仕事の話聞き、一人語りの文体で文章化する。
- D 共同学習で労働問題を深める→学習課題・学習内容を生徒たち自身で設定し、グループ学習する。関係機関への訪問活動を組み込む。

大阪府枚方市の地元高校集中受験運動の争点と今日的影響

教育学 濱 野 玲 子

1970年代初め、大阪府枚方市で市内に公立高校が新設されることをきっかけに、新設校を「底辺の学校にしない」をスローガンに地元高校集中受験運動（略称；「地元集中」）が始まった。これは厳しさを増す受験競争や学歴主義の弊害が社会問題化する中で、高校間格差是正、高校増設、地域に根ざした高校等を目指した教育問題である。反能力主義や反差別を理念として、点数によって格差をつくりながら人を振り分ける現行の高校入試制度を差別＝選別の制度として強く批判し、高校間の格差を否定し、仲間とともに地元高校を受験することと呼びかけた。「立場の自覚」や「集団主義」など解放教育からも多くを学び、理念や実践に生かされて

いった。

当時、教育の機会均等を守るために、高校間格差是正は緊要の問題ととらえられており、東京都や京都府のように、制度としてこれに取り組んでいる自治体も多かった。大阪府は総合選抜制が答申されながら、制度化は断念された。「地元集中」は制度ではなく、教組を主体とした市民レベルの運動として格差是正に取り組んだ点で特徴的である。

「地元集中」は高校間格差是正のために、原則的に一つの中学校から地元校と定められた市内にある一つの高校のみを受験させる（一校集中）、というかたちをとった。しかし制度的には、学区内にある学校なら旧制から新制に移行

した威信の高い高校や中堅校、そして次々増設される新設校のどれを受験してもよく、「進路選択の自由」をめぐって種々の軋轢が生じた。

枚方市は当時人口が急増し、より高い学歴を求める人々の欲求は強く、高校増設は焦眉の急であった。さらなる高校増設のために、「新設校を底辺校にしない」というメッセージは説得的であり、増設を求める高校は公立普通科である点で、人々の欲求と親和的であった。しかし多様化を差別＝選別として認めず、一元的な価値に収束させることは格差是正との間で矛盾を

生んだ。

実践面では進路選択を社会との繋がりで考えさせたり、「しんどい子」を中心にすえた仲間づくりなど、人間関係性を重視したすぐれた取り組みもなされた。しかし運動の結果を大学進学で見た場合、「輪切り」指導に比べて確かに新設校は底辺校化しにくいのが、進学上位校とそうでない高校との格差は「輪切り」以上に大きい。また男子の公立離れにも見られる。教育の自由化、個性化等の教育改革の中で、運動も形骸化が叫ばれ、その存在価値を失っていった。

「日の丸・君が代」の教育政策的、思想的考察 日教組の民主教育論の検証を通して

教育学 松 浦 茂

第一章においては、まず一点目に「日の丸・君が代」のイデオロギーである「愛国心」の日本の特殊的形成過程を論ずるものである。愛国心は幕末から明治の初めにかけて「外圧」に対する「憂い」として掻きたてられたものであった。それはまた、明治の指導者達によって統一国家形成のために天皇制と接合され、唱導されてきたものであった。同時にそれは支配層の「憂国の至情」の表現でもあった。

二点目に、戦後における「日の丸・君が代」論争のスタートとなった50年天野文相談話を取り上げる。天野文相の談話は修身科復活、国民実践要領の提唱などと連動したものであり、以降の歴代首相の発言の突破口的な位置にあった。歴代文相の口からは「国民としての精神の拠り所」「愛国心」「道徳律の必要」「民族精神」「国民精神」「紀元節復活」「教育勅語」などの言説が表出されていった。このような発言は占領終了期における、戦後世界体制の米・ソ対立構造とい

う情勢の下で、戦後民主教育の換骨奪胎をはかり、日本資本主義の自立・復活をかけた教育再編としてあった。この50年代の教育再編は日教組の戦後教育論を大きく規定していくこととなった。

三点目にこのような50年代再編に大きく規定されていった日教組の「平和と民主主義」路線とその問題点を指摘した。

第二章では、「日の丸・君が代」「愛国心」の問題を象徴的に内包する「期待される人間像」を取りあげ、そのイデオロギー性と教育思想の剔抉を試みたものである。「期待される人間像」は個性の尊重、自由などの戦後の価値に対して、義務や道徳や規範などを上から説諭するものであったが、それは“資本と国家のしもべたれ”ということとして提起されているものであった。また、高度経済成長政策の下での教育の多様化路線における“一貫した理念”を確立しようと

するものでもあった。

「期待される人間像」に対する日教組の対応は、戦後の民主主義に立脚点を置き、民族独立論、国民教育論として確立された民主教育論であったがゆえに、それは“国民国家強化論”に連なっていくものとして捉えることができ、「日の丸・君が代」を導出する国家のイデオロギーや論理に対抗でき得ないものとして批判的に考察した。

第三章では、「日の丸・君が代」をめぐる情勢のターニング・ポイントとしてあった85年の「日の丸・君が代、徹底通知」と89年の新学習指導要領をとりあげ、この二つが以降における強制と処分を拡大したものとして捉え、その背景に迫ろうとした。85年とは、「天皇在位60年式典」、臨教審教育改革論議の最中であり、また、新自由主義、新保守主義が登場した時代であり、国際化が叫ばれた時代でもあった。85年以降の教育改革の動きは、このような国際・国内、政治・経済状況の変化に対応した教育再編であった。

この80年代教育再編に対する日教組の論理は“反動化と国家主義”批判、“国民合意の教育改革”路線、そして、“平和と民主主義を確立するたたかい”として位置付けられていた。この日教組の民主主義教育論に対して、民主主義の内実を問うという観点から批判を加え、民主主義を構成する多種多様な要素の存在、差異をめぐる問題、それらの間の関係をめぐる問題としての民主主義の論理が日教組の論理には欠落していたことを批判する。

日教組の普遍主義化された民主主義論に対してこれを超え出んとする質を有していた解放教育、部落解放教育、在日朝鮮人教育を取り上げ

た。ここにおける教育の論理と実践は「日の丸・君が代」「愛国心」を相対化していく質を有していたものであった（はずであった）。

第四章では「日の丸・君が代」を導出する諸思想の中で、佐伯啓思氏の「国家論」と新京都学派といわれる人たち(梅原猛、上山春平、河合隼雄)の「日本文化論」を検証し、教育の今日的動向、すなわち教育基本法改訂の背景を思想の面から捉えようとするものである。彼らの言説は「西欧近代の超克」と「国家意識の強化」を目指す思想であり、「魂」「心」「命」と接合された「われわれの意識」によって、「国家意識の強化」を計ろうとするものである。また、「間柄主義一和の思想」「自然宗教」「日本文化の深層」「心のあり方」などをキーワードとする「日本文化論」によって「国際化の中の日本人」を描いていこうとするものである。このような論者の国家意識の強化、権力の中心に向かわせるイデオロギーこそが「日の丸・君が代」「愛国心」を導出する思想であると指摘した。

また、このような「国家意識の強化」の思想は、国家の下への人々の包摂だけでなく、排除と不断の緊張をもたらすものであることも指摘した。最後にこのような中心に向かう思想・論理とまったく逆のベクトルにおいて構想される、中島智子の「多文化教育論」を検証し、そこに「日の丸・君が代」「愛国心」の相対化の可能性があることを論述した。そこでは、かつての部落解放教育、在日朝鮮人教育、障害児教育などが補償教育の側面を持っていたこと、また、分野別教育論になりがちであったことを越えて、スケールの大きい教育改革運動として再構成されていく論理と構造の可能性を秘めていることを論述した。

「学校教育とジェンダー」

教育学 風 間 理 恵

第二波フェミニズムの思想から生まれた「ジェンダー」概念は近年では社会に浸透し、その影響を受ける形で男女雇用機会均等法の施行や労働基準法の改正など、制度面における男女差別は是正された。

しかし、人々の意識面はというと、依然として「ジェンダー」の枠組みにとらわれており、実生活においては「ジェンダー」のバイアスがかかっている事柄、場面が多い。つまり、一人一人に内面化された性別固定役割や、「男/女らしさ」をめぐる規範や価値観は変化していないのである。

こうした状況の中、人々の強固な「ジェンダー」意識を再生産する装置としての学校が問題化されるようになって久しい。学校は本来、男女平等を体現する場としての社会的な期待を追っているはずが、いわゆる「隠れたカリキュラム」がむしろ学校を男女差別の起因である性役割意識を子どもたちに植え付けているのである。本稿ではこうした「学校教育とジェンダー」をめぐる問題を検証、分析したうえで、それに対する解決策としてのジェンダー・フリー教育に照準し、そのあり方、課題・問題点、さらにはジェンダー・フリー教育の今後の方向性を検討する。

まず始めに、わが国の「ジェンダー」のあり方の現状を分析する。ここでは各種調査から、社会全体の「ジェンダー」に対する意識を明らかにしたうえで、問題の舞台を学校に移し、学校が再生産する「ジェンダー・バイアス」の実態を分析する。

ここから「ジェンダーと学校教育」における問題点を明確にし、それを乗り越えることを目指して近年学校現場に普及しつつあるジェンダー・フリー教育について考察していく。ここでは、ジェンダー・フリー教育とは何か、その具体的なあり方、目標、実践していくうえで求められるもの、さらにはこれまでの実践が教師や生徒に与えた影響、成果とその一方で顕在化してきた今後の課題や問題点を検討する。

最後に「ジェンダー・フリーの可能性」として、「ジェンダー・フリー」が目指す究極的な到達点とは何か、考察する。これは、単に人々の意識を「ジェンダー」の枠組みから解放することにとどまらず、そこからさらに展望できるものがあるのではないか、という「ジェンダー・フリー教育」を研究していく中で私自身が常に考えてきた問題であり、この論文において最も述べたかったテーマである。

『新たな学習スタイルを求めて』

～香川県仲多度郡琴平町の生涯学習のすがた～

教育学 藤井道子

1965年、ユネスコの成人教育推進国際会議でラングラン（Lengrand.P）が生涯教育についての明確な理念を提唱して40年近くになる。わが国でも、それ以前の1940年代後半に社会教育法が制定されて以来、国民に学校以外での教育、いわゆる社会教育の普及が全国的になされてきた。全国の公民館やその他の社会教育施設を拠点に様々な社会教育プログラムが行われ、学校教育以外でも人々は学ぶ機会を得ることができるようになっていった。ユネスコでのラングランの提唱と同時期に日本は社会的環境が急激に変化していった。相次ぐ科学技術の革新による社会機構の発達、日常生活の変化、高度経済成長による生活のゆとりが生じ、さらには医学、医療技術の目覚ましい発展により、人々の平均寿命は延び、これまでの人々を取り巻く生活様式がガラリと変化した。それにともない、社会教育に求められるものもずいぶん変化していった。高度経済成長以前、人々は社会教育分野に「生きていくため」についての知識習得を求めている。しかし衣食住に困ることなく、生活にもゆとりが出てくると、「生きていくため」から「急変する社会に対応できる能力」や「自己の内面や心を豊かにする」、「自己実現・自己創造をはかりたい」という欲求に人々の学習意欲は変化した。人々の社会教育に対する学習要求に应运えてきたのは国・都道府県・市町村などの自治体が主である。しかし、その中でも各地域の人々とより近い位置にある市町村が担う役割が大きい。

住民の学習意欲とそれに応える姿勢をとる各自治体の努力が社会教育におけるよりよい関係を作り出すことができるのである。そして、社会教育が生涯を通じて人々は学習し続けるものであるという「生涯学習」に呼び名を変えた現在、人々の熱心な学習意欲とそれに応える自治体の姿勢が実を結び、生涯学習活動啓発を表明する「生涯学習宣言都市」は全国で100を越えた。そして、その自治体の活動は新聞やテレビなどのメディアを通じて世に知られている。そしてそれ以外の自治体でも熱心に生涯学習事業に取り組んでいるところが多く、まさに全国的な生涯学習ブームの到来を迎えている。しかし、その一方で、近年の不景気により、自治体の経営困難に伴い、生涯学習事業が上手く立ち行かなくなっている自治体もまた存在する。そういった自治体の生涯学習事業はどのような状況に追い込まれているのだろうか。また、人々の学習要求にこの先応えていくことができる施策はあるのだろうか。そして、そのような自治体は新たな方向性を見出し、自治体にふさわしい新たな生涯学習のスタイルを作り出すことができず、このままでいるしかないのだろうか・・・。

今、そういった状況に置かれ、何とか新たな学習スタイルを見つけ出そうとしている香川県の小さな町をモデルに、県の状況や町の状況も踏まえ、生涯学習事業の現状から新たな学習スタイルを求めることができないかを本論文で考えてみたい。

珠算の熟達

－エラー発生に着目して－

教育学 伊藤智恵子

珠算の熟達について先行研究では、熟達するにつれて実物のそろばんなしでも速く正確に計算できるようになることに着目して、その「心内そろばん」と名付けられた技能の認知的メカニズムについて検討された。そして、「心内そろばん」が視覚的表象であり、熟達者がその表象を計算する時だけでなく数字を記憶する際にも使用するため、数字記憶の成績にも優れていることを示した。しかしそれらは、数字以外の、たとえば単語の記憶に正の転移が起こることはなく、また、珠算の熟達によって得たそろばん操作の手際のよさを6進法などの課題状況に対応させることができないことから、珠算の熟達は、決まりきった手順を幾度も練習することによりそれらの手順を速く、正確に行うことができるようになる、つまり手際がよくなるが、幅広い状況や課題には獲得したことを利用できない定型的熟達であるとされた。

しかし、それらの研究では、「心内そろばん」の獲得過程には目が向けられていない。獲得過程においては、そろばんを操作することと、心内の表象を形成することが同時に行われるため、そろばん操作という運動の側面と心内の表象という感覚の側面が協応させる必要がある。そして、そのような獲得過程における認知的特徴を反映することとして、エラーの発生が考えられる。

本研究は、珠算学習者のそろばん操作におけるエラーの発生に着目し、学習段階による違いを明らかにすることによって珠算熟達の新たな可能性を探索する目的で行われ、以下のことが

見出された。

調査Ⅰは、珠算教室に通う二段者と四段者を対象に、加減混合、10口の計算問題8問を読上算(実験者ペース・聴覚呈示課題)でのそろばん操作において発生するエラーを観察した。そして、エラーの数が、熟達度(段位)ではなく、その段位に至るまでの早さ、つまり熟達の早さに関連することが示唆された。また、エラーの内容から、熟達の遅い被観察者においては、独自の操作方法やそれによるエラーが発生し、また、特定のエラーが頻繁に観察されることが見出された。そして、段位による違いとしては、そろばん操作の自動化と高速化の違いがみられた。

調査Ⅱでは、調査Ⅰでみられた傾向がどの熟達段階にも当てはまる傾向であるのか検討し、また、個人の熟達によるエラー個数や内容の変化を捉える目的で行われた。課題は、調査Ⅰで使用された課題の、プラスマイナスの符号と桁数が同一の数字同士を入れ替えることによって作成された。被観察者は、調査Ⅰに参加した被観察者のうち追加調査の可能であった、二段者1名・四段者2名と、新たな参加者として三段者が2名であった。問題の提示方法などは調査Ⅰと同じ形式で行われた。そして、三段者においても熟達が早いほど、エラー発生数が少ないことが見出された。しかし、五段者においては、珠算歴が同一にも関わらず、エラー発生数に違いがみられた。このことは、ある程度以上の熟達においては、それまでとは異なった性質を示すとも考えられるが、五段者2名の、調査Ⅰ・Ⅱ間での熟達の早さに着目すると、熟達の早い

ほうにエラー数の減少していること、そして特に繰り上がり・繰り下がり操作の場面でみられた独特のエラーを、熟達の比較的早かった被観察者が克服していることが見てとれた。このように、エラーの発生、特にプロダクションとし

て記述され、その実行が自動化されることにより計算の高速化が実現する、繰り上がり・繰り下がりに関するエラーの数は、熟達の早さと関連することが示唆される。

大学生における自己評価と摂食態度との関係

教育学 青谷敦子

摂食障害は、青年期におけるひきこもりや不登校と同様に、人間の精神的な発達、人格形成が行われる青年期に起こり、社会との関係の深い病理の一つである。そして、摂食障害は、「飽食の時代」ともいえる先進国で起こる、溢れるほどの情報量の中、物質的にも恵まれた多すぎる刺激を受けた状態で起こる精神疾患ともいえる。また、摂食障害は戦後国民一人一人の生活水準が上がると共に現れた比較的新しい疾患であるように思われるが、実際は、300年ほど前から存在し、当時は、医学書でのみ目にするほどであったが、1960年代になって、欧米や日本で、一部専門家が注目し始めたことを皮切りにその患者数は80年代から急増し、現在も増加の傾向をたどっているという。

摂食障害は、そのほとんどが自分の体重を実際よりも過大評価するという特徴が見られ、その心理的要因として成熟拒否やボディーイメージの障害などその背景に見られる自我同一性の混乱、葛藤の問題があげられる。社会的には「痩せ賛美」に代表されるマスメディアによる偏った情報、社会自体の変化の中で人々の価値観が変化し、特に女性では豊満な身体への価値は下がり、痩身が成功の鍵であるかのように言われている。このボディーイメージの歪みが摂食態度の問題化を現すという仮説と、性の芽生

えから始まり、内面的な成長へ向かう青年期を発達段階的に捉える、つまりアイデンティティを統合し、正しいボディーイメージを所有しているというトータルな自己概念を形成し、そこからの自己評価が、肯定的であればあるほど、摂食態度の歪みは生じず、精神面も健康であるという仮説をもとに研究を始めた。

摂食態度を調べる EAT (Eating Attitudes Test: 中村道彦訳) 得点を累積度数をもとに分割された3群 (高得点群、中得点群、低得点群) と、ボディーイメージを計る HABIT (葉賀式 Body Image Test: 葉賀弘作成) の5尺度、自己概念を見る TSCS (Tennessee Self Concept Scale) 14尺度、自分自身の性を肯定的に受容できているかを調べる質問項目、そして精神状態・鬱状態を調べる KDCL (Kyoto Depression Check List) そしてタバコとアルコールの摂取状態と量の平均値と標準偏差をクロス集計し、分散分析による結果を比較検討した。その結果、HABIT の性的成熟・魅力、個性美の2尺度において、TSCS の自己批判と行・列・総行列変動性、反応分布尺度において優位な差が見られた。また、KDCL では優位差は見られないが、高得点群では鬱状態が半分以上を占めるという結果を得られた。自己概念・自己評価への不安定さが、摂食態度が厳しくなるほど強くなって

くる傾向、また、摂食態度が厳しい群ではうつ状態の割合が多いことなどがわかった。

そして、HABIT と TSCS における、中学生女子、高校生女子との比較から、中学生女子では HABIT のプロポーション、性的成熟・魅力、毛髪・個性美の3尺度において、TSCS では、自己肯定、自己批判、自己満足、身体的自己、人格的自己、行・総行列変動性、反応分布の8尺度において優位差が見られた。また、高校生女子では、HABIT のプロポーション、内蔵機能の2尺度において、TSCS の社会的自己、反応分布の2尺度において優位差が見られた。摂食態度と自己概念、特にボディーイメージの歪みとの関係が、年齢が低くなるほど、より強く影響していると推測された。そして、7年前の女子大学生との比較から、現在の女子大学生と比べて、ボディーイメージを含む自己概念を肯定的に受けとめられている方が、摂食態度もより健全であるという結果が出ている。

以上の結果から、摂食障害自体が低年齢化を起し、大学生よりも高校生、高校生よりも中学生と年代が下がるほど問題が多く見られることがわかる。これは中学生という第二性徴を迎え、身体の発達が始まる時期ということと、多くの刺激を受けながら、葛藤や矛盾、妥協をしながら少しずつ価値形成を行う最初の段階であり、成人の我々よりもマスメディアの情報に振りまわされやすい時期でもある。したがって、摂食障害の低年齢化には、社会や文化のあり方、特にマスメディアの影響が強く、時代が進むにつれて、自己評価の要因としての身体への意識向き方が低年齢化する、つまり年齢が低いほど、また従来の大学生の方が、自己概念に占めるボディーイメージが大きくなるということがわかった。

附事例として、EAT 得点の高かった男女数名、低かった女子の数名にロールシャッハテストを行い、そのパーソナリティの摂食態度と関係を検討した。そのうち、摂食障害予備軍と言える EAT の高い男女2名ずつ、合計4名の事例をあげたのだが、そこからは共通のパーソナリティ特性を見出すことはできなかった。大学生というアイデンティティを統合する最終段階の時期においては、摂食障害の要因は様々であり、より複雑化していることがうかがわれた。

以上より、中学生女子、高校生女子、大学生女子と発達段階的にボディーイメージの歪みと摂食態度との関係を見ると、発達段階が低いほどその傾向は強く見られることがわかった。つまり、中学生の結果に見られるように青年期前半では、目まぐるしい身体の変化に戸惑い、ボディーイメージも安定して保つことが難しく、その結果、摂食態度にボディーイメージの歪みが反映することに対し、青年期後期になると第2次性徴を終え、身体的発達や性的成熟が落ち着き、性同一性を確立することでボディーイメージの安定が見られ、結果として摂食障害の要因としてボディーイメージとの関係は弱まるといえる。個人がボディーイメージを含めた自己をどのように捉えているかという自己概念は、その個人の行動決定に重要な役割を果たしている。したがって、摂食障害が、思春期、青年期に好発年齢を迎えることから、若者たちがアイデンティティを歪みなく統合し、肯定的な自己概念を抱けるように援助することが、彼らの自己評価を高め、その結果摂食障害を防ぐことにつながるのではないかと考える。

大学生における自立についての諸相

教育学 奥村 和弘

自立はアイデンティティの確立と同様に青年期の中心的課題である。自立を発達的にとらえると、乳幼児期の行動的自立や身辺の自立、青年期の親からの心理的離乳といった精神的自立、主に成人期の経済的自立や老年者や障害を抱えた人々の生活における自立などが挙げられる。特に大学生になると経済的には親に依存しているが、大半の学生は精神的には親から離れ、自分のこれからの人生に対して自ら責任を負うという、それまでとは異なる能動的積極的な態度がみられるようになり、将来決定、これからの生き方といったその個人でしか解決できないような問題に直面するようになる。従来から青年期の研究には Havighurst.R.J の発達課題や Erikson.E.H の心理社会的発達段階が重要な位置を占めてきた。自立については、本明(1991)は「自我が統合する力(強さ)を持つこと」であり「自立は単純な価値観による規制ではなく、あくまで現実の社会や他者の要請を取り入れた上での統制」であるとしている。この意味では精神的自立とは肯定的なアイデンティティを確立することであり、肯定的な自己意識を持つことのように思える。本研究では自立を、それまでの親からの依存とは異なる新たな親との成熟な関係を形成し、自ら主体的に判断し責任を負った行動ができ、1人の人間として社会の一員としての適応への過程であるとし、大学生における自立の問題について、精神的自立、社会的自立の2面から捉え、大学生の自立を精神的健康だけでなく、学生生活におけるライフイベントとの関係を検討することを目的としている。

本研究では大学生(男子学生=146名、女子

学生=272名)を対象として、デモグラフィック項目、精神的自立尺度、社会的自立尺度、エリクソン心理社会的段階目録(EPIS)、自尊心尺度、Kyoto Depression Check List(KDCL)の短縮版、自我強度(ES)尺度の短縮版からなる質問紙による調査を行った。

調査の結果、大学生の自立と学生生活の関係において以下のような結果を得た。

- ① 自立的と意識している者の方が自分を自立的でないと意識している者よりも勤勉性、同一性、親密性といった発達課題をより獲得しており、高い自尊心を抱き、罪責感や精神的不安といったものを訴えることなく精神的にも健康的に学生生活を送っていることが示された。逆に自立性の低い者は発達課題の面でも未獲得な部分が多く、罪責感、精神的不安、悲哀感、自信喪失など精神保健の面からも半健康状態にあり、低い自尊心を抱いていた。しかし、精神保健の面からはより精神的健康者の方が半健康者よりも精神的自立、社会的自立の両側面において自立的であったが、精神的自立内の親子関係では有意な差が認められなかった。
- ② 自立と学年別との関係では、上位学年の方が下位学年よりも精神的自立、社会的自立の両側面において自立的であったが、精神的自立内の親子関係では有意な差が認められなかった。性別においては男子学生の方が女子学生よりも精神的自立、特に判断・責任性において自立的であったが、その他の面では有意な差が認められなかった。
- ③ 大学生活において関わりのあるものとして、居住別や将来設計別では精神的自立内の判

断・責任性において有意な差が認められ、恋人（親しい異性の友人）別、アルバイト別で

は社会的自立内の友人関係の確立において有意な差が認められた。

女子大学生の月経における心身症状 及びジェンダーに関する研究

教育学 木下 亜子

思春期にある女性にとって、初経を迎えること・月経を肯定していく過程というものが重要な指標であることは周知の事実である。そのことは第二性徴期を経過した女性において、月経は現在の身体的精神的な健康状態を知る上でも、人生設計を行っていく上でも非常に重要な意味を持つはずである。

しかし、月経によって女性の約9割が心身にさまざまな影響を受け、中には「月経前症候群(PMS)」などのように耐えられない程の痛みに苦しんだり、イライラ感・憂鬱などの不快な精神症状に悩んだりする女性もいる。

そこで、関西の私立大学に在籍している女子学生を対象に、月経が精神症状にどのように影響するのか、また、女性特有のものである月経を受け入れることは、月経によるさまざまな症状や精神的健康と関連するのかを検討した。

質問紙方式を採用し、①月経後2週間以内（月経前・月経中ではない時）、②月経前、③月経中、の3つの期間中にそれぞれ答えること、後日回収であること、一ヶ月ほどの期間を要すること、などの旨を説明するように配慮した。

調査内容は、①フェイク・月経に関する質問・KDCL・ジェンダータイプ尺度、学生用ストレス尺度、②③中は、フェイク・PMS診断の身体症状項目・KDCL・ジェンダー尺度・学生用ストレス尺度、をそれぞれ使用した。

統計的処理を行った結果、月経に伴う精神症

状には、ジェンダータイプ・月経痛の強さ・ストレスなどさまざまな関連がみられた。

ジェンダーに関して、アイデンティティを確立させ、女性にとって不可避な月経を受け入れ、社会に適応していくことは、精神的健康とも結びつきがあると考えられる。

ストレスに関して、精神的に不安定な人ほど月経時において高くなるなど、精神的健康と時期によってストレス度に違いがみられた。

精神症状に関して、月経前・月経中どちらの時期においても不快な症状が起きやすい傾向がみられた。また、月経痛が強い人（PMS 予備軍）ほど、精神症状も憎悪傾向にあることが示唆された。しかし、全体の約4割の人が普段の精神症状を月経によらず維持するほかに、月経前には精神症状が安定する人もみられた。つまり、月経によって、精神症状にマイナス作用する人、逆に安定する人、精神症状に影響しない人など、さまざまであり、月経によって精神症状に影響がみられるということは、必ずしも月経がマイナス要因となるのではないと言える。

これらのことから、今後の課題として、PMS などのように月経痛が強く私生活に差し障りのある人や、摂食障害と結びついて無月経状態が起こっている人、ストレスなどから月経不順になる人など、月経にはさまざまな問題が絡んでいる。それだけに月経における問題は軽視出来ず、いろんな観点から月経をとらえてい

くことが、なお必要であるといえよう。

世界各地でみられてきた月経不浄観の歴史を背景として、現在でも月経や月経痛に対する社会全体の理解や意識は高いとはいえない。女性の一生の半分近くは月経を経験するのであるから、月経を健康の指標としてポジティブに受け

入れられるか否かで、その人の人生にも影響を少なからず与えるといえるであろう。そのためには、社会全体が女性や月経について積極的に理解し、援助していく姿勢が必要不可欠であろうし、月経研究も更に進めていく必要があるだろう。

孤独の心理について

教育学 中西幸子

孤独とは何であろうか。孤独としてまず思い浮かべるのは、一人でいるということなのではないだろうか。しかし、一人でいるから孤独と覚えるとは限らない。一人でいても孤独を感じない人もいれば、大勢の人に囲まれていても孤独と覚える人もいよう。孤独とはどのような状況を意味するのか考えていきたいと思う。

落合 (1982) によると、孤独の規定因は、

- 1 人との関係に関する次元
- 2 自己のあり方の意識に関する次元
- 3 時間的展望に関する次元
- 4 物理的孤立条件(外的に見てわかる孤立条件)に関する次元

の4つの次元に分けられ、この4つの次元は、心理的条件と物理的条件(内的条件と外的条件)の2条件に分けられた。

では、孤独とどのようにむきあっていけばよいのだろうか。

孤独がひとりでいることに淋しさを感じるマイナスイメージだとすると、ひとりでいることを意味し、マイナスでもプラスでもないイメージのことばを使って、区別すればいいのではないだろうか。そうすれば、一人でいても、孤独の淋しさはないことを意味できる。一人でいることが苦痛である孤独と、自分で好んで一人になることを区別できるのである。

なぜ人は一人になりたがるのか。人の経験や性格によって変わってくるが、他人に横から口出しされずに、自分の好きなように、自由にさせてほしいということがあるだろう。

他人から束縛されないことが、人間の尊厳である。また、人は、ときには、一人でゆっくり考えてみたいことがあり、そういうときは、他人の存在が気になることがある。自分一人でいたいとき、自分のことは、放っておいてほしいと思うことがある。他人といるということは、他人と時間を共有することであり、互いに二度と帰らない時間を分かち合うことである。時間を分かち合うことによって、ひとは、したしくなる。

また、ブルースト、『失われた時を求めて』で、失われた時間は決して消え去ったわけではないこと、記憶の中に当時そのままに残っていること、失われた時間を取り戻すことによって、快感が得られることを発見した。過去と現在のどちらに自分がいるのかわからなくなるとき、時間の外にすることができ、この見出された不滅の時間の中では、自分の死に対する不安がやみ、孤独に苦しむことがなくなる。失われた時間を取り戻すためには、自分史を書くことである。

孤独を対処するためには、自分を見つめなおすことである。

ティーンエージマザーの育児不安に関する研究

—母子支援の手がかりを求めて—

教育学 荒田加奈子

1. 序論

10代で出産した若い女性（ティーンエージマザー）に対する世間の目は冷たい。「子どもが子どもを産んで」という考えが一般的なのではないだろうか。彼女たちなりに必死で子育てをしているという実感を伝えたい。

ティーンエージマザーが毎日何に喜びを感じ何を不安に思い生活しているのか、どんな夢を持ち生きているのか、彼女たちの言葉で語られることから、彼女たちを本当に理解し、そこから見えてくる支援の展望を得ることが本研究の目的である。

2. 本研究の方法について

本研究は、①6名のティーンエージマザーへのインタビューを中心に、②神奈川県親子教室に参加した際のティーンエージマザー6名へのアンケート（この内1名はインタビューも含む）と共に成り立っている。これらの研究は質的研究を用いて分析している。

3. 結果ならびに考察

分析の結果、成長していく子どもを見つめる喜びを感じながら毎日在必死に生きているティーンエージマザーの現実が認められた。厳しい経済状況や周囲の同年代との生活の違いを感じ

ながらも、自らの成長をも実感し夢を持って生活していることが明らかとなった。

さらに、ティーンエージマザーがより安定した状態で子どもに向き合い、子育てをするために、今最も必要な支援は経済的不安の軽減のための支援と、夫が父親としての自覚や実感を得るための支援であることも示された。

彼女たちが支援を求めてきたとき、または彼女たちに支援を届けるときに、「できちゃった結婚」のネガティブなレッテルを通して彼女たちを見ることなく、本研究で得られたようなティーンエージマザーが毎日を頑張っているというポジティブな理解を、援助する側の姿勢として持ち支援して行っていきたいと筆者は願う。

4. 今後の課題

今回の調査で、多くのティーンエージマザーが10代で父親となった男性の実感や自覚の欠如について言及した。母親と同様子どもの養育者である父親が、妻の妊娠の判明時、子どもの出産時、子育て時、その時々で何を感じているのか。ティーンエージマザーへのインタビューを実施することで、支援のさらなる展望が見えてくると考える。

戦後日本におけるカウンセリング導入についての インタビュー調査

教育学 岡本 寿文

昨今、心の問題、それに対するケアなどが多く叫ばれ、臨床家、特にカウンセラーの必要性がますます注目されているが、そもそも、なぜカウンセリングが日本に導入されることになったかという経緯はあまり知られていない。

本研究では、カウンセリングが日本に導入された経緯、なぜ日本に導入されなくてはならなかったのか、導入に関わったカウンセラーは当時どのような思いをもって活動をしていたのかなどを検討していく。

まず最初に、日本へのカウンセリング導入について一般的に言われている経緯について振り返った。カウンセリングが日本に導入されたのは、戦後の民主化に伴う教育改革の一環として1948年から1952年に行われた「教育的な指導者のための特殊講座（IFEL=Institute For Educational Leadership）」が最初とされ、その中の講座のひとつとして紹介された。また同じく1948年に、東京文理科大学（現筑波大学）教育相談部の友田不二男、当時東北大学教授の正木正がそれぞれ別の形でロジャーズ（Carl R.Rogers）のカウンセリング理論と出会い、その理論の可能性や有効性を自身の著書に示した。その後、1955年に茨城キリスト教短期大学で行われた「第1回カウンセリング研究討論会（大甕ワークショップ）」を始めとして、全国各地でカウンセリングに関するワークショップが開かれ、日本にカウンセリングが導入され発展していった。

以上の経緯を踏まえた上で、より詳しい当時の様子を知るために、実際に当時から活動している6名のカウンセラーに計7回のインタビュ

ーを実施した。インタビュー協力者の選定は、筆者の指導教授である島瀬直子からの紹介や、インタビューを実施したカウンセラーから紹介を受けるなどして協力者を広げていった。結果的に下記の6名との面接を実施することができた。

- ①古屋 健治氏（山梨大学名誉教授）
- ②平野 正敏氏（日本カウンセリングセンター理事）
- ③島瀬 稔氏（関西人間関係研究センター代表）
- ④村山 正治氏（東亜大学大学院教授）
- ⑤友田不二男氏（日本カウンセリングセンター顧問）
- ⑥繁田 千恵氏（立正大学学生部カウンセラー）

インタビュー方法は、事前に文書にて研究目的と質問項目（①日本へのカウンセリング導入の経緯について②当時の臨床家の目的意識、個人的な思い、具体的な活動③これからの臨床家に必要とされるものは？）を伝え、実際のインタビューでは自由に語ってもらい、そのインタビュー中にまた気になった点があれば質問するという形にした。

インタビュー結果から考えられる導入の背景としては、IFELなどの政治的な目的からの導入は大きなきっかけではあるが、従来の助言・指導を中心とした相談活動に替わる新しい関わり方がその経験から必要とされていたという背景が、日本へのカウンセリング導入における重要な要因として挙げられる。そして、カウンセ

リングを社会に向けて意識的にアピールするのではなく、自らの実践から経験し感じていた問題意識と向き合い取り組んだ結果としてカウンセリングが導入・発展していったという考えには、心理臨床家ならではの意見だと感じた。

導入期当時のカウンセラーが経験してきた数々の困難な状況や、実践から経験し感じてきた思い、さらには筆者を含め、これから臨床家を目指す者たちへのメッセージが、本研究を通して伝わることを願う。

子どもの「自己」を見つめる経験とその意義

—小学校における箱イメージ書き込み法等の試みから—

教育学 小原 祥子

社会の急激な変化に伴い、子ども達を取り巻く環境は、その心身の成長にとって厳しさを増している。大人たちの価値観の「揺れ」は、子ども達はもちろん、その教育の場である学校にも大きな影響を与えている。

子ども達の成長には、家庭の役割が重要な位置を占めていると考えられるが、親もまた、自らが育ってきた環境を背景に持つ一人の人間として、容易には克服できない課題を抱えている場合が少なくない。

このような時代に生きる子ども達に対して、「学校」は何ができるのだろうか。子ども達を、その在学期間という短い単位で捉えるのではなく、生涯発達の世界に立ち、卒業後も、またさらには大人になってからも、人として生きる自分を支えてくれる力の基となる「経験」を与えられる「学校」が、今後、よりいっそう求められるのではないか。

子ども達が「問題行動」に行き着く前に、その予防や積極的な健康促進をはかることが重要であるという発想から、対処の仕方や問題解決の力を身につけていくための方法として、フォーカシングのクリアリング・ア・スペースを学級集団で実施する「箱イメージ書き込み法」が

ある。(村山、1984)(山中・村山、1999) また、妹尾(1997)はこの方法を「開発的教育相談」として、小学校で実践している。

「自分自身を生涯にわたって支える力」を培うために有効であると考えられる方法として、「自己を見つめる(感じる)経験」といえる「箱イメージ書き込み法」を学校現場に導入、以下の方法で実践研究を行った。

筆者が、昨年度より学生ボランティアとして関わっている小学校の6年生4クラスにおいて、

- ① 自尊感情アンケートとして、ポーブラ(1988)のセルフエスティーム測定尺度の中の全般的尺度10項目のみを実施。
 - ② 導入として「気持ちいいことのフォーカシング」を実施。
 - ③ 「気持ちの整理箱」(箱イメージ書き込み法)を2回実施。
 - ④ 今回の体験についてのアンケート(箱イメージ法チェックリスト)(妹尾、1997)を実施。
 - ⑤ 子どもへのインタビュー(希望者のみ)
 - ⑥ 6年担任及び養護教諭インタビュー
 - ⑦ ①～⑥で得られた資料を、総合的に考察。
- 今回、方法における②・③については4クラ

ス中3クラスを各担任教諭が、1クラスを筆者が教示者となって実施した。筆者が担当したクラスでは、③1回目の記入内容や表記の仕方に、他の3クラスに比べ、「子ども達の警戒心」が見て取れたが、③2回目にはそれも少なくなり、今回の体験について肯定的に受け止めていることがうかがえた。

自尊感情アンケートと「気持ちの整理箱」（箱イメージ書き込み法）等の、「自分を見つめる時間」の体験についての評価アンケートから、自尊感情が低いと思われる児童はそうでない児童に比べ、今回の体験については、評価が低い傾向が見て取れた。しかし、この方法についての評価では、むしろ高い結果を示す項目もあった。彼らにとって、自分を見つめる（感じる）ことは、つらいことではあるが、それによって自分自身のことがわかって来るという点で、必要なことだと考えている様子がうかがえた。

子どもにとって、「自己」を見つめる経験は、「主体感覚（自分が自分の体験の主であるとい

う当たり前の感覚）」（吉良、1997、2002）を実感する経験に通ずるのではないか。子ども達を取り巻く状況そのものを変えることはむずかしくとも、その「状況」を体験し、そこから何かを感じ取っている主体は自分自身であることを実感する経験は、主体としての「自分」の確かな存在を実感する経験でもある。これは、卒業後も生かされる貴重な経験となりうるだろう。また、この経験には、そこに、彼らのありのままの姿に温かな関心を寄せる大人の存在が必要不可欠である。

今回は実施回数が少ない中での考察となったが、担任以外による実践、スクールカウンセラー等が学級の雰囲気を感じ取る機会として活用できることなど、この方法を学校現場に導入することによって生まれる様々な可能性も示唆されたように思う。今後、長期継続したケースの考察、また、卒業後に、この経験がどう生かされたかの追跡なども実施していきたいと考えている。